

昭和大学医療救援隊として被災地で医療支援を行いました。



昭和大学では今回の東日本大震災に際して、特に被害の大きかった岩手県山田町の医療支援を行うため、昭和大学医療救援隊を団結し3月15日から約1か月間、延べ107名の医療従事者が医療支援を行いました。当院からもさまざまな職種から20名が参加しました。その活動報告の一部を掲載いたします。

被災地における昭和大学医療救援隊の活動

第7陣 感染対策室 感染管理認定看護師 日高絵美

昭和大学は東日本大震災の発生を受け、『昭和大学医療救援隊』を結成しました。各附属病院から有志を募り、3月15日（震災後4日目）第1陣が岩手県へ出発しました。4月16日に第7陣が戻るまで学生を含む計107名が被災地へ赴き、当院からは20名が参加しました。活動場所となった岩手県下閉伊郡山田町では、1階が津波で壊滅した病院の2階で診療を行うと同時に、複数の避難所や被災者の自宅を廻り訪問診療を行いました。多くは高血圧・感冒などの慢性疾患でしたが、自宅を津波で流され薬を求めて診療所に来られる方、全壊した自宅の片付け中にガラス片で負傷した方、瓦礫撤去中に釘を踏み抜いた警察官などにも対応しました。また町中で山積みになった瓦礫からは多量の粉塵が風で舞い、呼吸器症状や結膜炎症状を訴える方も診療しました。

私は第7陣の一員として、医療救援活動に参加しました。避難所になっている小学校に拠点置いて寝泊りし、診療を行いながら、継続治療を要する患者様の地域開業医への引き継ぎを行い、理学療法士中心に廃用症候群予防のリハビリを実施しました。また、現地では数百名が避難する大規模避難所でインフルエンザが大流行しており、地域全体に広がる危険がありました。私は日頃、感染対策室に所属し感染管理を行っていますので、診療の合間をみて医師や看護師、薬剤師と協力し、各避難所の衛生管理と感染症対策を確認して廻り、被災者の方々に感染対策講習会と手指衛生・咳エチケットの指導を行いました。

実際に被災者の方々と1週間生活を共にし、この震災の爪痕が想像以上に大きいことを痛感しました。「救援隊の姿を見ると元気になる」と笑顔で言ってくれた方、津波で亡くした夫への感謝の気持ちを泣きながら診療所で話された方、「次に来た時は、沢山お土産持たせるから」と声をかけて下さった方、忘れられない方が沢山います。私達の活動は一時期に過ぎませんが、それが山田町復興の一助となったこと、そして被災された全ての方に、平穏な日常が一日も早く戻ることを、心から願っています。



北部病院メンバー

【第1陣】H23.3.15～H23.3.20

耳鼻咽喉科医師 洲崎勲夫
8A病棟看護師 長澤彩子
産婦人科病棟助産師 金澤 美紀子

【第2陣】H23.3.19～H23.3.24

耳鼻咽喉科医師 門倉義幸
呼吸器センター医師 鈴木浩介
こどもセンター医師 大戸秀恭

【第3陣】H23.3.23～H23.3.28

7B病棟看護師 西洋子
救急病棟看護師 宮本千尋
薬局薬剤師 石井亜矢子

【第4陣】H23.3.27～H23.4.1

呼吸器センター医師 堀内一哉
こどもセンター医師 渡邊太郎
NICU看護師 百瀬加名子
看護部助産師 太田千春
薬局薬剤師 石川唯美
医事課事務 羽田徳永

【第5陣】H23.3.31～H23.4.4

救急病棟看護師 跡部円
4B病棟看護師 安藤美奈子

【第7陣】H23.4.9～H23.4.16

メンタルセンター医師 菊池優
感染対策室看護師 日高絵美
薬局薬剤師 小泉史子

編集後記

この「病院だより」がお手元に届くころには、梅雨も明けて猛暑の日々が続いていることと思います。今夏のテーマは、どのご家庭でも企業でも「節電」ではないでしょうか。私も医療機関においては、適切な医療提供を行う使命のもと、政府主導の電力使用規制は行われないうちとなりました。しかし規制の有無に関わらず、社会的義務として院内各所において節電対策を行っています。特に、弱冷房(室温28℃)やエレベーターの一部運行停止など、来院する皆さんにもご迷惑をお掛けいたしますが、全国民が協力してこの未曾有の事態を乗り切るためにも、ご理解とご協力のほどお願いいたします。

巷では、節電のあまり熱中症が多く発生しているようです。私も病院スタッフはクールビズを実施中です。皆さんも来院時はなるべく軽装でお越しください。また、しっかりと水分補給をして、お互いに体調を崩さないよう今夏を乗り切りましょう。

管理課 増田 滋

北部病院だより 第66号

第66号【2011/7/1 発行】

発行者：昭和大学横浜市北部病院

●巻頭言 『皮膚科における東日本大震災後医療支援活動報告』

皮膚科 准教授 宋 寅傑

- イベント情報
ロビーコンサート
- 患者様からのご意見・ご要望
- 医師の配属・異動・退職
- 診療統計
- 外来担当表
- 昭和大学医療救援隊活動報告



昭和大学医療救援隊の活動拠点となった岩手県立山田病院

巻頭言

『皮膚科における東日本大震災後医療支援活動報告』

東日本大震災から早くも4ヵ月が経過しましたが、テレビや新聞では、大震災の残したあまりにも大きな爪痕が、今も連日のように報じられています。震災の後、国の内外から数々の医療支援団体が被災地に入り、医療支援活動を展開しておりますが、昭和大学におきましても大学単位、病院単位などで多数の医療支援チームが結成され、活発な支援活動を展開して参りました。今回は、6月初旬に当院皮膚科の杉山美紀子助教が参加いたしました日本皮膚科学会による医療支援活動につきまして、その活動内容を報告させていただきます。

日本皮膚科学会では、大震災の後、昭和大学医学部皮膚科の飯島正文教授（現・日本皮膚科学会理事）を本部長とする「日本皮膚科学会東日本大震災対策本部」が設立され、同本部の指揮の下に1チーム4人編成の皮膚科医師チームが第1陣から第8陣まで8組結成されました。各組が1週ごとに被災地（主に宮城県の気仙沼、石巻、女川地区）に派遣され、4月20日から6月11日まで計8週間にわたって現地にて皮膚科医療支援活動を展開いたしました。杉山助教はその第7陣に参加し、6月1日（水）から6月4日（土）まで、宮城県の被災地にて医療活動を行って参りました。以下に、杉山助教からの報告文をそのまま掲載させていただきます。

東日本大震災が発生した3月11日以降、テレビなどの報道で現地の様子を知るにつれ、自分が皮膚科医として何かできることはないのかと考えておりました。そんな折、4月中旬に日本皮膚科学会から会員宛のメールを受け取りました。そのメールは、被災された方々に対し復旧、復興の支援を行うため、自主的な意思でボランティア診療に参加する皮膚科医を募集しているという内容のものでした。そのような機会があるならば是非参加したいと思い、皮膚科責任者の宋医師に相談したところ、即日快諾を得ることができました。応募後に、実は募集人数以上の皮膚科医が応募していたことを知りましたが、私は幸運にも参加の許可をいただくことができ、第7陣として6月1日～4日（移動期間2日間を含む）の期間で宮城県へ派遣されることとなりました。診療活動に必要な薬剤、機材等は、日本皮膚科学会により準備されておりました。自分の属する第7陣のメンバーは国立大学の名誉教授を含む経験豊かな先生方でした。今回、仙台市を拠点とし、東北大学の先生方に案内されて南三陸町、石巻市、女川町方面への移動診療を行いました。以下に実際の活動内容を記させていただきます。

第1日目 6月2日（木）：①南三陸町の在宅の患者様の訪問診療および②石巻市の避難所での要介護の方々の診療を行いました。南三陸町では町内の公立津川病院に訪問看護ステーションが併設されておりましたが、津波で被災したため、日本皮膚科学会ボランティア医師が地域の各家庭へ訪問して医療支援を行っている状況でした。移動中に公立津川病院に立ち寄り、被害を受けた建物を目のあたりにしました。5階建てのビルは4階までが津波で壊滅的損傷を受け、近くの地面には病院の備品らしき消毒瓶や軟膏などが転がっておりました。この病院では診療を再開するためイスラエルからの協力を得て別の場所に仮設の診療所を立ち上げているところでした。石巻市の避難所では訪問看護等の介護医療のサポートを要する方々を集めて、地域の訪問看護サービスが復興するまでの医療支援を行っておりました。動けない患者様の診察を行う際には看護師たちが周囲に段ボールの囲いを作って支え持ち、患者様のプライバシーを守りつつ診療が行われておりました。

第2日目 6月3日（金）：③石巻市の小学校の避難所、④同市市立病院に併設された老人ホーム、および⑤女川町の避難所での診療を行いました。石巻市の小学校の避難所は石巻漁港に近く、津波の被害を特に大きく受けた地域でした。基幹病院が被災し損壊したため慢性疾患の患者様の診察が必要とされておりました。市立病院併設の老人ホームでは震災後の長時間停電を契機に褥創（床ずれ）が発症もしくは悪化してしまった高齢者の方々を中心に診察を行いました。また、女川町の避難所では、日中の避難所滞在者の減少に伴って、受診患者様も減少傾向にあり、10歳以下の小児と60歳以上の高齢の方々が、受診患者様の中心でした。

今回、4名の皮膚科医で前述の①～⑤箇所を巡回し、計44名の診療を行いました。避難所も徐々にですが縮小傾向にあり、避難者も日中に避難所を離れて働いているため、震災後月日の経過とともに、受診患者様の多くは次第に小児と高齢者になってきたということでした。2日間という短い期間でしたが、全体的な印象として、高齢の患者様ではやはり褥瘡（床ずれ）が多く、また小児ではアトピー性皮膚炎、さ瘡（ニキビ）、成人では湿疹や乾癬などの慢性疾患の患者様が多く見受けられたように思います。今回、緊急を要する患者様を診察する機会はあまりありませんでしたが、慢性疾患の患者様で避難生活のためにかかりつけ医を失ってしまった方々の今後の継続診療をどのように行うかが課題であると考えました。

以上が、杉山助教からの医療支援活動報告です。杉山医師不在の間、当院の皮膚科受診患者様には御迷惑をおかけ申し上げましたが、上記に述べた事情に免じて、お許しをいただければ幸いです。皮膚科では、日々患者様に御満足いただけるような日常診療を行いながら、今後また今回のような非常の事態が生じた際には、社会のお役に立てるような活動にも是非参加させていただきたいと考えております。以上、当科の杉山医師が6月に参加いたしました東日本大震災後の医療支援活動につきまして、今回御報告させていただきます。

皮膚科 准教授 宋 寅傑

被災地で診療を行う 杉山助教（左）

